



レトロな豪華列車で行く日帰り旅行 ベルモンド・プリティッシュ・プルマン

初めに

レトロなサロン仕様の豪華列車「プリティッシュ・プルマン」をご存じだろうか。アガサ・クリスティーの代表作「オリエント急行殺人事件」に登場するベニス・シンプロン・オリエント・エクスプレスと同系列の豪華列車で、こちらはイギリス国内の日帰りの旅を提供している。オリエント・エクスプレスと同じように豪華で優雅なテイストのこのプリティッシュ・プルマンが世界で最も有名と言われる蒸気機関車「フライング・スコッツマン」に引かれて英国の鉄道200周年記念のイベントに行く、という鉄道マニア方が喜びそうな何ともレアな体験をしてきた。鉄道マニアでなくとも、プリティッシュ・プルマンのラグジュアリーダイニングや、フライング・スコッツマン体験はユニークで試す価値があると思うのでここで共有をさせていただきたいと思う。



私自身は特に鉄道ファンというわけではないのだが、自家用車を持たないため郊外に行くときには必然的に鉄道を利用することが多い。行き先を考えながら路線図を見たり、また路線図を見ながら旅程を考えたりするのが好きな方である。一旦乗車してしまえば目的地までの時間が自由に使えるし、車窓から外を眺めているだけで変わりゆく景色を楽しめ、運転の責任がないことなどから列車の旅自体は気楽でよい。列車に揺られながらコーヒーを飲んだり何かを食べたりしている

と、何となく非日常的でワクワクした気持ちになるというのがこれまでの列車の旅の所感だった。

しかし、このプリティッシュ・プルマンの日帰りトリップはこれまでの列車の旅のイメージを打ち破り、ゆったりと時間が流れる古き良き時代にタイムスリップしたかのような気分させてくれた。また、初めて本物の蒸気機関車を間近に見てその姿に感動し「にわか撮り鉄」と化したことも思い出深い。

豪華列車の旅に出発

ビクトリア駅から8時出発ということで少し早めに駅に着いた。乗場の1番線脇にあるプリティッシュ・プルマン専用のラウンジが集合場所だ。通常の待合室が少しきれいになった感じのラウンジでは飲物が自由に飲めるようになっていて出発までの時間を快適に過ごすことができる。ドレスコードはスマートカジュアルと聞いていたが、暑い夏日であったにも関わらずドレスアップした人たちの姿も多く見られ、普通の列車旅とは一味違う雰囲気を感じられた。出発時間の少し前に1番線への入口で受付が始まった。通常のプラットフォームと異なり自動改札ではなく、品の良いスーツの制服を来たベルモンドの係員がうやうやしく各人のチケットを目視して乗場へ誘導する。





私たちが乗る列車はすでにホームに停車していた。クリーム色にエンジがアクセントのクラシックな車両の入口にはそれぞれオードリー、ヴェラ、ミネルヴァなど名前が付いている。私たちの車両はグウェン (Gwen) だ。ホームを歩いていくと、車窓の奥にヴィンテージのテーブルランプや生け花、きちんとセッティングされたテーブルなどが見える。グウェンの入口に着くと、制服に白手袋を着けた女性のスチュワードが待っていてにこやかに中へ招き入れてくれた。



それぞれの車両が食堂車になっているのだが、重厚な木製のテーブルに糊のきいた真っ白なテーブルクロス、大きな背もたれのついたソファータイプの椅子というサロン仕様で、木製の窓枠や真鍮製の金属部分はいずれもピカピカに磨きあげられている。床はカーペットでダイニングだけでなく通路の方まで敷き詰められていて、まさに昔の映画のシーンの様だ。指定されたテーブルに案内され着席すると間もなく発車となった。豪華列車での旅の始まりだ。



ブリティッシュ・プルマンは1920年代のヴィンテージの列車を修復したものだそう。かつては王族が乗車したこともあるほか、元首相ウィンストン・チャーチルの葬儀列車としても使用されたという。11両の車両にはそれぞれに名前が付けられており、各車両で異なる個性的な内装となっている。



ブリティッシュ・プルマンのサイトには各車両にまつわる歴史や物語が紹介されているが、私たちの「グウェン」は「1948年に、姉妹車両のモナと共に、エリザベス女王、そして後に皇太后（クイーンマザー）をブライトンへ輸送するために使用された。1972年に運行を終了し、エセックスのホースレス・キャリッジでレストランとして保存されていた。」とあった。私たちの車両は両側の窓際に対面2人掛けのテーブルがあってカップルや2人組が利用するような造りになっていたが、隣の車両を見に行くと4名座れる個室になっていた。誕生祝や記念日などに個室で楽しむのも素敵なアイディアだと思った。





ランチタイム

このトリップへの参加の楽しみのひとつは食事だ。ランチとディナーが付いているので、異なるタイプの食事を試すことができる。プリティッシュ・プルマンは熟練シェフによる凝った料理と豊富なワインセクションが売りで、乗車中は「スチュワード」と呼ばれる専任係員が一流のサービスをしてくれるのも特別感を出してくれる。

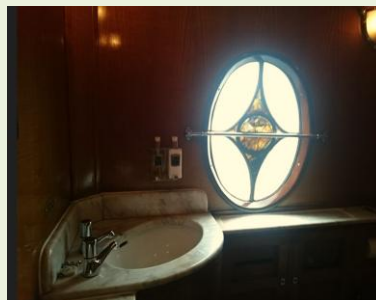


ビクトリアを出発してしばらくするとランチタイムとなった。美しい銀のカトラリーにクリスタルガラスのグラスでランチをいただくなどという機会は稀なので、じっくり楽しむことにする。まずは食前酒としてベリーニが出てくる。目の前で桃のピューレとよく冷えたプロセッコが順にグラスに注がれて出来上がったベリーニはフルーティーで、朝から贅沢な気分になった。これにペイストリーが2種、自家製グラノーラにヨーグルトとフレッシュなフルーツを添えたものと続く。スチュワードのサーブは丁寧でゆったりとしていて、合間にはベリーニのお代わりがふんだんにふるまわれた。メインはウィルトシャー産ローストハムとポーチドエッグを載せたイングリッシュマフィン。ちょうどよい塩加減のハムと半熟のポーチドエッグ、ホルンデーズソースの組み合わせがとても良い。車窓から流れゆく景色を眺めながら、優雅な気分であぐらランチは格別だった。



フライング・スコッツマン現る

ビクトリアを出発してから約3時間半ほどでケタリング (Kettering) という駅に到着した。ここであの蒸気機関車のフライング・スコッツマンと接続することになっている。客車からホームに一旦降ろされて待つこと5分余り、気が付くと隣の線路の後方から煙が見えてきて、シャシャシャシャ、シャシャシャシャ、シュッポー、と蒸気機関車の走る音と汽笛が聞こえてくるではないか。またたく間に蒸気機関車の黒光りしている顔の部分が現れ、緑色のボディーの中ほどに「Flying Scotsman」のロゴが見えた。蒸気機関車と係員の控室のような車両の計2両が私たちの前をすぐに駆け抜けていった。この先で線路を変更してバックで戻ってくるらしい。



戻りを待っている間に、隣のホームや駅の入口に人だかりがしているのが見えた。私たちがいるホームはプリティッシュ・プルマンの乗員のみしかアクセスできなくなっているので、蒸気機関車を見たい人は普通に入れる隣のホームに集まってきているようだ。多くの人がカメラを抱えて、蒸気機関車の戻りを今か今かと待ち構えている。そうしているうちに、先ほどの蒸気機関車が戻ってきてプリティッシュ・プルマンの客車と結合した。ここからは蒸気機関車がプリティッシュ・プルマンの車両を引いていくのだ。私たちは車内に戻り、そこから次の停車駅ダービーまでの1時間半ほどを蒸気機関車に引かれて移動した。ここで驚いたのが、蒸気機関車ではそんなにスピードがでないと勝手な想像をしていたのだが、いざ動き出すと先ほどまでの電車と変わらないスピードで走っているようだった。また、ガタガタと揺れがあるかとも思ったがそんなことはなく、煙も車窓からはまったく



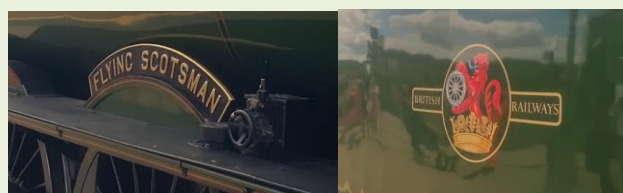
見えないので、蒸気機関車に引かれているとは想像できずちょっと拍子抜けしてしまった。



フライング・スコッツマン

「世界で最も有名な蒸気機関車」として紹介されることもある「フライング・スコッツマン」。自身では、スコットランドへ行くなら1度は乗ってみたい列車くらいの認識しかなく、蒸気機関車との関係がいまひとつ分からなかったので自分なりに調べてみた。フライング・スコッツマンという名は、1923年に始まった

ロンドン・アンド・ノース・イースタン鉄道 (LNER) で初めて開発された蒸気機関車につけられた愛称のようだ。この蒸気機関車は1934年には世界史上初めて時速100マイル (約160キロ) を達成したという。恐らくこれが「世界で最も有名な」につながるのだろう。一方でロンドンとエジンバラというイギリスの2大都市とつなぐ高速列車サービスも「フライング・スコッツマン」と呼ばれているが、実際にはこの路線は1860年代に始まっていて、1924年の大英帝国博覧会でイギリスの鉄道技術や蒸気機関車を取り上げた際に蒸気機関車にちなんで「フライング・スコッツマン」という名を後付けしたらしい。いずれにせよ、フライング・スコッツマンという名はイギリスの鉄道・技術革新の象徴なのだろう。



蒸気機関車と撮り鉄

走行中に窓から外を眺めていると、線路沿いや途中の通過駅で私たちの列車を一目見ようとたくさんの人たちが集まっているのに気づく。いわゆる「撮り鉄」である。老若男女が携帯または一カメラを構えてじっと待っている。三脚付きの人もいる。こんな限られた区間の走行で通るのは一瞬のことなのに、どこでどうやってこのスケジュールを知るのだろうか。



次の停車駅のダービーでは鉄道の展示イベントを見に行くため下車した。列車のドアが開くと同時に、私たちは我先にと蒸気機関車のある先頭車両へと向かった。停車しているフライング・スコッツマンの姿をもう一度この目で未届け、写真に収めるのだ。機関車のところまでたどり着くと、この日のヒーローである機関士たちが整列していた。ケタリングからダービーまでの約1時間半くらいの間に頭から足先まで煤だらけになっている。顔も煤で黒くなり、白目がギョロリと目立つ。大変な仕事だけれど、機関士の方たちは皆とても誇らし気でいい表情をされていた。見ている私たちもなぜか感動し、心からの拍手を送った。このような機会はまずないので、機関士と記念撮影もしてもらった。

私たちがイベントにいつている間、客車は別の場所で待機するのだろう。フライング・スコッツマンとはここでお別れだ。周囲の撮り鉄も私達も、名残惜しむようにフライング・スコッツマンの姿を追い、シャッターをこれでもかというほど切っている間に、蒸気機関車は客車を引いてどこかに向かって走り去った。





グレート・ギャザリング (The Greatest Gathering)

この「グレート・ギャザリング」は英国の鉄道200周年記念の一環のイベントで、ALSTOMという鉄道車両や関連技術の製造やメンテナンスなどをする会社のダービーにある敷地が会場となっていた。3日間の同イベントでは鉄道の現在、過去、未来を代表する140台以上の象徴的な車両が展示されていた。敷地内にある工場が一般公開されるのは約50年ぶりとのこと。



敷地内に入ると、家族連れもたくさんいて大勢の人で賑わっていた。これまでどこに格納されていたのか疑うくらい、歴史的な車両や機関車、蒸気機関車の数々が屋内外に所狭しと並べられていた。中には実際に運転席に座れるものや客車に座れるものもあり、鉄道好きにはたまらない体験ができる。敷地内ではミニ蒸気機関車が走行していて、子供も大人も大喜びで乗車していた。鉄道の展示以外には、鉄道に関するお土産品やコレクターズアイテムのショップのほか、遊具や大道芸、アイスクリームバンやキッチンカーも出ていてフェスティバル気分を盛り上げていた。

後日掲載されていた写真を見ると、先ほどプリティッシュ・プルマンの車両を引いていたフライング・スコッツマンもこの敷地内に展示されたようだ。また、後でわかったのだが、このイベントには英国内のみならずヨーロッパや世界の各地から鉄道ファンが駆け付けていたようで、多くの人たちがインスタなどのSNSにこの日の体験を投稿していた。鉄道というのが、世界中に根強い人気があることが分かった。



ロンドンへの帰路 4コースディナーにフリーフローのワイン

かれこれ4時間ほどの見学が済むと、ダービーからロンドンへの帰路についた。帰りは蒸気機関車でなく普通電車での移動で約3時間45分でピクトリアに帰着の予定だ。列車に乗り込むとすぐにディナータイムが始



まる。ランチをいただいてからかれこれ6時間ほど経っていて、おまけにダービーの鉄道の展示会場で歩き回ったからほどよく空腹になっている。食事には飲物が含まれているので、ワインの種類や値段を気にしながら頼む必要がなくとても楽だ。食べ・飲みが好きな人にはとても魅力的なパッケージである。

食事の前にまずはシャンパンで乾杯。スターターはヤギのチーズのムース。少々クセのあるヤギのチーズも軽い口当たりのムースに仕上げられており、ピーツや葉野菜を添えてあり彩りもよい。この後、滑らかなトマトスープにバジルのピューレを添えたものが続く。料理の合間はグラスが空きそうになるとスチュワードが駆け付け、スパークリングワインに白、ロゼ、赤と次々にワインを勧めてくる。あれもこれもと進められるまま試飲をしているとあっという間にワイングラスがずらりとテーブルに並んでしまった。



メインはニジマスのコンフィにコジェットのピューレ、パンチェッタとえんどう豆にディル風味の乳化ソース添え。パンフライでなくあえてコンフィにすることでマスに火が通りすぎずしっとり滑らかな触感に仕上がった逸品だった。ここまでですでお腹がいっぱいになったが、せっかくなのでデザートもいただいてみる。チョコレート製の薄いタルト型にチョコレートムースとコンフレク、ひまわりの種をあしらった、マーマレードを添えたもの。見た目ほど甘さも強くなくて結局完食してしまった。ワインは全部で4、5種類飲んだだろうか。フリーフローの噂は本当だった。ほどよく酔いもまわり、寛ぎながらワインをゆったり楽しむうちに9時半過ぎにビクトリアに帰着した。



今回は蒸気機関車と鉄道イベントとの組み合わせで食事2回、所用時間が約11時間半という長めの旅だった。このほか、ブリティッシュ・プルマンにはバース、オックスフォードやブレナム宮殿といった人気の観光地を訪問するものや、ミステリー小説をテーマに乗客とキャストでイマーシブ体験するもの、途中下車せず列車内でランチするもの、季節や行事の特別版など様々なプログラムがある。誕生日や記念日、母の日、父の日など特別な時に贈りたい特別な旅としてお勧めである。

ベルモンド・ブリティッシュ・プルマン

https://www.belmond.com/trains/europe/uk/belmond-british-pullman/?srsltid=AfmBOoruxlUmvMVNtxuNboaL40TltKfieY5PS2v4QGNVuKGHT-1yaQ_H

※マイバスでは混乗の半日・1日ツアーのほか、お好みに合わせたプライベート観光のお手配もしています。アシスタント同行のショッピングツアーや街歩き、ガイド同行でじっくり貸し切り観光など、お気軽にお問合せください。

※9月27日(土)、ケントのワイナリー「ガズボーン (Gusbourne)」を日本人ワインスペシャリストと訪れるツアーの催行が決定いたしました。詳細とお申込みは以下からご覧ください。

<https://mybus-europe.jp/eBroucher.do?countryCode=GB&cityCode=LON&itemCode=JPGB0066>

お会計の際、日本クラブ会員様専用のコード (MBGBclu2) をご利用いただくと10%割引が適用されます。(割引有効9月11日まで)

JTBヨーロッパ マイバスUK 北出泉水

https://mybus-europe.jp/info_uk@mybys-europe.com

Tel: 020 3167 9197

(営業時間: 月~金 10:00~17:00)